

『遠野物語』の魅力——私たちは何を伝えていくのか

柳田國男研究会会員 小田 富英氏

1. はじめに

明けましておめでとうございます。3月まで武蔵野市の教員をしていました小田です。附馬牛地区のみなさんには、6年前からの「ふるさと学校体験留学」でお世話になっております。私、小学校の教員になる前から、柳田國男の研究を始めまして、遠野に来たのも、今から36年前のことです。研究と実践の両面で、遠野にかかわって、ちょうどこの発刊100周年の年に、この場にいることができる幸せを感じているところです。



さて、年の初めということで、柳田の新年の挨拶をひとつご紹介します。ちょうど60年前の昭和25年の新年の集まりの時に、柳田は、このようなことを言います。「今年は、寅年ですが、私は、十二支のなかで、寅年と未年のふたつだけが、よくわかりません。」と言うのです。何がわからないかということ、このふたつの動物は日本にいない、日本にいないということは、もともとの呼び名がなかったと考えられ、中国から入ってきた「寅」とか「未」の漢字をどうして「トラ」とか「ヒツジ」と呼んだのかということなのです。このへんが、柳田らしいところで、普通の発想でしたら、新年の挨拶なのですから、寅のたとえとか諺にはこんなのがありますと紹介するのが、民俗学者柳田の発想なのかなと思うところですが、そうではないのです。柳田は、そういう意味で言うと、何でもものを見るときに、その原初のかたちや心情の起源というものを探りたくなる性分を持っているのでしょう。

今日のキーワードの一つは「起源」ということです。たとえば、鹿踊りでも花巻の鹿踊りと遠野の鹿踊りを見たら、どっちが古いのかということを考える習性を柳田は持っていた。そういう人だという理解を私はしています。そして、どちらが古いのかを考えてから、ではどのような変遷、変化をしていくのかということで、民俗学という学問を位置づけるようにしています。何でも変わっていくのが当たり前なので、その変わり方をよく見ていきましょうというのが、柳田の学問なんですね。

ここで柳田が、古いものがこう変化してきたときに、どういうふうに変わってきたのかという想像力をたくましくするんですが、今日は、その想像力をたくましくして未来につなげていきましょう、と。その「『遠野物語』発刊100年」というのが今ここにあって、これから100年、私たちが想像力をたくましくしなければならず、そのために、少しでもお役に立てればと思っていますところです。

2. わたしと遠野

先ほど話しましたように、故後藤総一郎先生と出会って柳田研究を始めたのが、今から38年前で、その2年後に遠野に来ました。だいたい土淵地区を自転車で回ったのですが、ダンノハナやデンデラノがどこか分からなくて、畑で仕事をしている方に聞いても、どこだか分からないという感じでした。この附馬牛の道を通って早池峰神社までバスに乗って行ったことを思い出しますが、この前後から観光客も増えてきたのではないのでしょうか。先日、昔の写真などを整理していましたが、この観光パンフレットが出てきました。ご存知ですか。回しますのでご覧ください。

この観光パンフレットのタイトルが、「遠野盆地」です。今は宮守と合併したから遠野の宣伝で「遠野盆地」というように表現すると問題があるかもしれませんが、当時、「遠野盆地」のこの空間は、すごく不思議

識な空間として印象に残りました。

私は今でも、釜石線に乗って遠野に入ってくる、あの上りと下りの感覚が好きです。

今日のキーワードの二つ目は、「盆地」です。これについては、後で具体的に「遠野物語」の話を読みながら考えたいと思います。

最初に遠野に来てから、しばらくは足が向かなかったのですが、『口語訳 遠野物語』の「註」を書いたので、出版パーティーに来るくらいで、こんなに深いつき合いになるとは思っていませんでした。私にとってラッキーだったのは、異動した武蔵野市が遠野市と友好都市となっていたということで、今から16、17年前に始まった武蔵野市のセカンドスクールの試行段階からかかわることができ、土淵地区と上郷地区とのお付き合いが始まったわけです。

セカンドスクールが遠野でできなくなってからは、しばらく空白の期間が続いたのですが、その後、社会教育の方で「遠野・武蔵野児童交流」、遠野市教育委員会の事業の「ふるさと学校体験留学」が始まって、また、毎年子どもたちを引率して遠野に来れるようになったわけです。

「ふるさと学校体験留学」では、1年目から附馬牛小学校と地域のみなさんにお世話になり、今日いらしている北田校長先生にも昨年、大変お世話になり感謝しているところです。

私は毎年、子どもたちをホームステイのお宅に置いて、東京に帰るのですが、東京駅で子どもたちを迎えると、東京駅から吉祥寺、武蔵境までだいたい40分かかるとは思っていたのですが、その電車の中でずっと子どもたちはしゃべりっぱなしです。最初に、附馬牛でお世話になった子たちが、今ちょうど高校2年生ですか。その子たちが、電車の中で、私に遠野のお土産をくれました。菅原神社のお祭りの相撲大会に出て、3位になって賞金をもらったからと言うのです。私は、3位の賞金が、5千円と驚いたのですが、次の年に附馬牛小学校でその話をしたら、「いや小田先生、あれは賞金じゃなくて、おひねりですよ」って言われてしまいました。聞けば、地元の中学生に勝ったからおじいちゃん、おばあちゃんたちがおひねりを投げてくれたそうです。ここにも、出していただいた方いらっしゃるのではないのでしょうか。その節は、ありがとうございました。

東京の子たちが遠野から帰ってくると、いちばん最初に言うのが、「遠野は夜が真っ暗、というよりも真っ黒だった」というのと、それから、「天井が高い大きな家で、小さな子からおじいちゃん、おばあちゃんまで、3世代、4世代の家族が、朝起きてから、夜寝るまで、大きな声で話をしているのにびっくりした」ということです。確かに、東京の子たちは、核家族の子が多く、その上、家族のコミュニケーションの時間も少なくなっているのが現状ですので、びっくりするのも当然です。

このような体験で何がかわるかという、生活力とかコミュニケーション能力とかは、すぐに目に見えて変わることはなくても、あるいは、期待できなくても、確実な変化は、自分の生活を再認識できるということです。20年近く、地域間交流の場に子どもたちを連れてきて、この点は強く感じます。

一緒に遠野に来た子たちは、述べて700人くらいになるのでしょうか。1番上の子は、もう30歳を超えています。一昨年、遠野の子が武蔵野に来た時に、お世話係の指導員を募集するのですが、そこに来た指導員に、何で応募したのかを聞くと、中学生の時、試行段階のセカンドスクールに来て、遠野が好きになり、それから何かある度に、バイクで遠野に来ていますというのです。遠野に行く度に、気分転換というか、エネルギーをもらってくるので、遠野から子どもたちが来るというので、恩返し気持ちもあり応募しましたと言うのです。このように、加速度的に子どもの交流は進んでいます。遠野の子たちも東京に行くのを楽しみにしてくれてますし、刺激も受けて、いい循環となっているのではないのでしょうか。10年、20年後が楽しみです。

次は、大人の交流が課題です。私は、小学校の教員を辞めたのですが、以前から言い続けているのが、武蔵野市と遠野市の教員の人事交流です。先ほども、北田校長先生とそれができるとおもしろいですねという話をしたんですが、近いうちにできればいいなと思っています。

3. 『遠野物語』との出会い

自己紹介が長くなってしまいましたが、今日の話の核心なんですけど、『遠野物語』というのを、意外とこの遠野の方たちは読んでいないんですよ。みなさんはどうですか。柳田國男についても誤解されていたり、『遠野物語』も遠野の昔話だったら読まなくてもわかっていると思われていたりで、『遠野物語』を手にとっていない方が多いのではないのでしょうか。今日は、少しでも『遠野物語』はこういうおもしろさがあるんですよ、いつも聞いている昔話とは違うんですよ、ということをお話しようと思っています。

私が、柳田國男や『遠野物語』に出会ったのは、柳田國男や『遠野物語』がおもしろいということで出会ったのではなくて、まるっきり柳田の本を読んでいなくて、『遠野物語』も読んでいない段階でした。私たちの世代の方はご存知かと思うのですが、詩人で思想家で吉本隆明という人がいるのですが、若い人には、吉本ばななのお父さんだよという分かるのですが…。

私が、大学に入った頃、その吉本隆明が『共同幻想論』という本を書いたのですね。書いてあることは難しくて分からないのですが、何かかっこいいのです。「共同幻想」論という言葉の響きもいいし、書いてあることも、国家とは共同幻想だとか、男女の恋愛も対の幻想だとか、人のつくる共同体というのは、こういうものなのかというのを、何となく刺激を受けた本なのです。その『共同幻想論』を吉本隆明が書いた土台になっているのが、『遠野物語』と『古事記』なのです。吉本隆明という人が、『遠野物語』を土台にして、『共同幻想論』で自分の新しい論理を展開したわけです。その『共同幻想論』を読んで、『遠野物語』を読みたくて、柳田國男を勉強し始めたのです。でも、結局は、「共同幻想」論の意味もまだ分からなくて、もう1回、『共同幻想論』を読み直す必要を感じているところです。

そういう意味で、柳田のことも分からず、『遠野物語』も読まず、後藤総一郎先生のもとでの研究会に参加したのですが、その時初めて、『遠野物語』を読みました。声に出して読むということから始まりました。私は、この頃、柳田國男が松岡國男であった少年から青年時代に、田山花袋や国木田独步、島崎藤村などの交友関係のなかで、抒情詩を書いていたころのことを調べていたので、『遠野物語』を文学として読み、そのおもしろさを強く感じたのです。

その後、後藤先生の紹介で、松本に住む池上隆佑さんの所に行って、池上さんが持っている『遠野物語』の柳田自筆の毛筆稿本と、ペン書き稿本、活字本の3部作を写真にとり、比較することができました。そして、判ったことをまとめて『国文学』という雑誌に発表したのが、1982年のことです。1月号だったのですが、その前号には、先ほどお話した『共同幻想論』の吉本隆明も書くという予告が載り、同じ雑誌に吉本と自分の名前が載ると、興奮したことを覚えています。残念ながら、事情で吉本隆明の柳田國男論は、この号には掲載されず、私の興奮は長く続かなかったのですが。

しかし、この論文のおかげで、反響も寄せられ、大田区の区民講座で、毎週1回の7回連続講座の講師にも呼ばれました。この講座では、毎回参加している方に、『遠野物語』の代表的な話を声に出して読んでもらってから、私の話につなげるという流れで進め、私自身も、とても勉強になりました。みなさんも、家にお帰りになったら、どれかひとつの話を選んで、声に出して読んでみてください。今日の三つ目のキーワードは、「口に出し、耳で聴く」ということです。

4. 『遠野物語』と柳田國男をめぐる評価

では、これまでの研究の流れのなかで、『遠野物語』やそれを書いた柳田國男がどのように評価されているのかを簡単にご紹介します。なぜかという、肯定的な評価と、否定的な評価では、自ずと『遠野物語』の読み方が違って来るからです。

おもしろく読めるか、つまらなくなるかというのが、現在の柳田研究の分かれ道にもなっています。今、どちらかというと、若い世代は、柳田のことを批判して柳田の文章を読む人が多くなってきているのです。極端なことを言うと、最近では、その段階を飛び越えて、柳田を読まなくなっていると言ってもいいかと思います。これは、ちょっと日本の悲劇じゃないかと私は思うのですが。なぜかと言うと、柳田國男という

のは官僚なわけですね。『遠野物語』を書いたときは、法制局第二部というところに勤めていまして、仕事としては、日韓併合の事務作業をしていたんじゃないかと言われてます。実質、条文づくりは、第一部なので、直接の仕事ではありませんが、明治政府から勲章も報奨金ももらっています。そういうのを知ると、官僚としてそういう仕事をしていながら、『遠野物語』を書いたということは何か裏に意味があるのではないかと、柳田が『遠野物語』を書いたのは、明治政府の、日本の帝国主義の政府のやり方を支えるために書いたのではないかと、そういう論調が自明のこのように言われてきます。当時、遠野には、伊能嘉矩という人物がいて台湾の先住民族の研究をしていましたが、柳田が遠野に来たのは、その伊能に会いに来たのが第1の目的で、台湾の山人について知りたかったからだと、疑いもなく論文に書く研究者も出てきています。伊能嘉矩がかわいそうですね。

こうした批判に対して、一面的すぎると感じて、改めて考えてみると、柳田は、日本という国をどのような国に作っていけばよいのかを真剣に考えていたのだなという、少壮官僚としての柳田の願いが見えてくることになります。

このように、柳田國男の仕事を肯定的に見るか、否定的に見るかで、『遠野物語』の読み方が大きく変わってくるのです。

私はもちろん、肯定的に評価しているのですが、そうすると、おもしろさは、『遠野物語』の話の中だけでなく、『遠野物語』をめぐる人脈のつながりにも広がってくるのです。

折口信夫や金田一京助など、『遠野物語』を入り口にして、柳田学に近づいてきた人は限りなく多いのです。あと、文学、文芸評論の方面で言うと、桑原武夫です。桑原武夫や今西錦司などの京都学派の人たちと柳田國男との出会いは、かなり大きなテーマになりますが、このポイントも『遠野物語』です。今日は、詳しく触れることができませんが、桑原の『『遠野物語』から』の文章のなかで、名前のあがった芥川龍之介のことだけお話しします。芥川は、一高に入学したばかりの18歳の時に、『遠野物語』を読んでいます。350部のうちの「第二五八号」と柳田の字で書かれた『遠野物語』を購入したか、もらったかで手に入れて、「一九一〇年十一月三日 芥川文庫」という署名をした本が残っているのです。

このような人脈のおもしろさがあるし、また、『遠野物語』をベースにした文学の可能性もあると思います。

しかし、否定的な見方で読んでいくと、どうしても『遠野物語』を一面的にしか読めなくなってしまっ、おもしろさは感じなくなります。

『遠野物語』はおもしろいので、毛嫌いしないで、1度読んでくださいと、今日は改めてみなさんに呼びかけたいと思うのです。

5. 『遠野物語』を読むうえで忘れてはならないこと

遠野テレビというケーブルテレビがありますよね。遠野テレビのディレクターの三浦さんが、東京にあるJ：COM東京というケーブルテレビのディレクターの方とお友達で、その縁で、今までも何回か、J：COM東京で遠野の特集を組んで宣伝してくれています。先日、『遠野物語』100周年の遠野の取り組みの特集番組を作るといので、私も呼ばれてきました。遠野からは、土淵小の子ども語り部の子3人と引率の方たちが来て、1時間の番組をつくってくれたのです。

その番組はなかなかよくできているので、遠野でも流れるといいなと思っているのですが、できた番組を後から見て、残念なことがひとつだけありました。それは、このナレーションに、「明治時代の民俗学者、柳田國男さんが・・・」というように流れたのです。もうみなさん、おわかりですよね。柳田が『遠野物語』を書いた時は、民俗学者にはなっていなかったのです。まだ、何者にもなっていない35歳の少壮官僚なわけです。このことをきちんと押さえて読む必要があります。

そうすると、次に、柳田のそれまでの人生のなかで、『遠野物語』を書く必然性、あるいは、水野葉舟に連れられてきた佐々木喜善が語る遠野の話に出会う必然性といったことを知らなくてはならないということになります。

ここを詳しくお話ししていると、時間がなくなり、肝心の物語を読めなくなりますので、要点だけ箇条書

きにまとめてみたのでご覧ください。

- ①少年期からの読書体験。辻川の三木家、布川の小川家の蔵書をむさぼり読んだ2度にわたる「乱読体験」で、『遠野物語』にも出てくるような臨死体験などの不思議な話に出会います。
- ②和歌を習うために入門した桂園派の師、松浦辰男（萩坪）の影響。昔をそのまま人にしたような萩坪から、現世とかくり世を自在に行き来する生き方を学びます。
- ③ヨーロッパ文学のいち早い受容。ハイネの『諸神流鼠記』などの本をいち早く読み、キリスト教以前の土着の神々への視点をもちます。『遠野物語』の註に書き込んだ、マーテルリンクの本をいつ読んだのかも最近の研究でわかってきています。
- ④農政官僚、産業組合講師としての講演旅行での見聞。とくに明治39年の樺太、北海道旅行と、明治41年の九州(椎葉)、刊行後の44年の美濃越前旅行での関心と比較して読むとよく分かります。
- ⑤「この書を外国に在る人々に呈す」と「願はくは此を語りて平地人を戦慄せしめよ」の意味を自分の言葉に直して理解してみる。

このようなことを自分なりに理解して『遠野物語』を読むと、同じ話でも、深まりが出てくると思います。その上で、大切なことは、柳田は、この『遠野物語』を刊行して何を訴えたかったのかということと、何をしたかったのかという大きな問題を考えることです。

何を訴えたかったかということは、友人である田山花袋の描こうとした文学の世界と比較してみると分かります。花袋の『蒲団』という小説は、みなさん読まれているかと思いますが、柳田の感覚からはほど遠い世界のものでした。柳田の『北国紀行』や、『山の人生』と比べてみると、人生観の違いを読みとることが出来ます。このことについては、私を含めて多くの人が論じていますので、今日は紹介だけにしておきます。

今日の三つ目のキーワードの「耳で聴く」ということについて、エピソードをひとつ紹介したいと思います。それは、昭和8年の話です。1月に、『人情地理』という雑誌が創刊されます。この雑誌は、いわゆる「3号雑誌」で5号ほどでつぶれてしまうのですが、柳田は雑誌の創刊号には、不思議と協力的で、この雑誌にも、創刊号にある企画を提供するのです。その企画というのが、「[耳で聞いた話]を募る」というものです。しかし、創刊号の呼びかけは、柳田の思いと異なり、「珍しい」「郷土色豊かな」「埋もれている話」を求めるといふものでした。ですから、当然、読者からの応募は、その土地の伝説を長々と小説のように書き綴ったものが集まってきて、多分、柳田は怒りのなかで書いたのでしょうけれども、3号に柳田の名前で「我々の求めるもの」という文を載せることとなります。このように書いています。一部分だけ読んでみます。

「子供でも老女でも又はるぼうの人でも、最も単純な者の話した通りをきいて感じたままに書き現わす技術を、読者諸君の間に競争していただきたいと思った。(略)

感想や批評を入れるのは自由だが、少なくとも主要部分は、自分で無い者の実際話したことでなければならぬ。」

「聞いて感じたまま」というのがおもしろいですね。『遠野物語』の序文にもあるように、「遠野物語」も「感じたままに」書いたものだったのです。

柳田は、耳から入ってきた話を、「簡単明瞭にむずかしい言葉が入らない会話」として書き表す技術をも身につけてもらいたいと願っているわけです。こうした柳田の姿勢は、『遠野物語』を書く明治末から、「話す・聞く」を重視する国語教科書を作った昭和20年代後半まで一貫しています。この辺の問題は、私の現在の関心の1番大きなところですので、また何かの機会に発表させていただけたらと思っていますが、いづれにしても、柳田が、「耳で聴く」ことをいかに重要視していたかがおわかりいただけると思います。

二つ目のキーワード「遠野盆地」の中で渦巻いていた、当時の「語りの世界」つまりは、「耳で聴く」力が十分に備わっていた時代を記述したのが、『遠野物語』だったのです。